



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

### 第 39 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1 靖国神社遊就館内・地階

電話 03 (6380) 8943  
FAX 03 (6380) 8952

<http://ireikyou.com>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能  
発行人 岩田司朗  
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

### 目次

年頭のご挨拶(島村宜伸会長).....	1
謹賀新年.....	2
奉悼 三笠宮崇仁親王殿下薨去.....	3
「全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑」 に参拝して.....	5
ビルマ(現ミャンマー)の防衛作戦 と慰霊③―インパール作戦後―.....	7
凍星の祈り―奇跡の生還―.....	12
事務局からの報告等.....	15

## 年頭のご挨拶



島村宜伸会長

新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体の皆様には、御家族共々、良いお正月をお迎えのことと拝察し、お慶び申し上げます。

また、旧年中は本協議会の活動に、多大の御協力、御支援をいただき、心から御礼申し上げます。

さて、昨年は、戦没者慰霊に関して二つの嬉しい出来事がありました。まず、一月に天皇、皇后両陛下が、

大東亜戦争最大の激戦地フィリピンを訪問され、友好親善の促進に合わせ、国と国民を代表して約百万名に上る彼の国の戦没者に慰霊の誠を捧げられるとともに、約五十二万名に達する我が国の戦没者の御霊に追悼と感謝の誠を捧げられました。

私達一同、その尊いお姿を拝し、戦没者慰霊に対する思いを新たにいたしました。

次いで、三月には、遷延に次ぐ遷延が続いていた戦没者の遺骨収集を国の責務と規定した「戦没者遺骨収集推進法」が成立いたしました。

「戦没者遺骨収集は国の責務」と、今頃になって規定すること自体、異郷の地で帰国を待ちわびておられる百二十万余の戦没者には誠に申し訳ない思いですが、今後も慰霊諸団体の御意見をいただきながら、この法律に基づき新たな体制が、御遺骨収容の抜本

的促進に繋がるよう尽力して参りたいと考えております。

また、七月九日に本協議会と戦没者慰霊諸団体が合同で主催した平成二十八年度合同慰霊祭は、関係諸団体の御尽力により、一昨年の終戦七十周年企画と同程度の百八十七名(在宅参拝者を含む)の方々に御参列いただき、感慨深く執り行うことができました。

御協力いただきました会員並びに慰霊諸団体の皆様改めて厚く御礼申し上げます。

その他、国内では、七月の参議院議員選挙において政権与党が圧勝し、引き続き安定した政権運営が期待される反面、海外では、米国大統領選挙において、米国第一主義を掲げるトランプ氏が勝利するという波乱があり、今後の日米間形への影響が懸念されます。一方、アジアでは、中国の経済不安と異常な軍備増強を背景とした領土拡



靖国神社奉納大絵馬

靖国大絵馬は、愛知県名古屋伊勢絵馬協賛会安田識人氏から御祭神奉慰のため、昭和五十三年から毎年奉納いただいているもので、横二・七六メートル、高さ二・一九メートルのジャンボ絵馬として新春の靖国の名物となっている。

大の動き、朝鮮半島における北朝鮮の狂的とも言える核・ミサイル戦力の強化と韓国の大統領の不正疑惑追及に伴う政情不安、中東諸国におけるイスラム過激派の台頭と内戦、それから派生する難民問題等、我が国を取り巻く情勢は、ますます複雑流動化しております。加えて、四月の熊本地震、十月の鳥取県中部地震、夏から秋にかけての各地での台風災害など、史上稀に見る自然災害が日本列島各地を襲い、多くの被害をもたらしました。

これも、天が我が国に与えた試練かと思うだけに肅然とさせられます。新しい年を迎え、本協議会の使命の重大性と各方面から寄せられる期待の

大きさに改めて身の引き締まる思いがしておりますが、今年も心新たに戦没者慰霊の諸活動に取り組みたいと考えておりますので、旧年同様、慰霊諸団体並びに会員の皆様の一層の御協力、御支援をお願いいたします。

ところで、大東亜戦争と戦没者慰霊思想の普及啓蒙への取組みですが、戦友・遺族の老齢化・減少とともに、大東亜戦争において日本軍将兵が、劣悪な条件下で如何に良く戦ったかを知らない世代が急速に増加しております。今年、このことを知ってもらうことに重点を置いた普及啓蒙活動を心掛けたいと思っております。

また、本年も例年同様、七月に本協

議会参加団体及び協力団体の合同の形で大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を執り行います。

高齢化が進み、活動停止を余儀なくされた戦没者慰霊団体についても、永代会員として、そのお名前を連ね、慰霊の誠を捧げていただく形を大事にしたいと思っております。

諸団体におかれましても、今後の慰霊事業永続のため、御要望がありましたら、是非お聞かせ下さるようお願い申し上げます。

次に、海外戦没者の御遺骨収容については、今年是新法に基づき設立された指定法人「日本戦没者遺骨収集推進協会」が本格的に活動する年となります。

本協議会は、今後も新しい体制が御遺骨収容の抜本的促進につながるよう積極的に関わっていきたくと考えておりますので、関係諸団体の御支援、御協力を切にお願い申し上げます。

旧年を回顧し、新年への願いを期しましたが、私自身、これらを思い描きながら、心新たに、年頭の靖國神社の神前に額ずきたいと思っております。本年も、皆様の御協力と御支援を、よろしくお願い申し上げます。

平成二十九年元旦

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸

新年 賀 謹

公益財団法人 偕行社

会長 志摩 篤  
 理事長 富澤 暉  
 副理事長 塩田 章  
 副理事長 深山 明  
 副理事長 白石 一郎  
 副理事長 大越 兼行  
 専務理事 小柳 毫向  
 理事 若木 利博  
 兼事務局長

公益財団法人 水交会

会長 藤田 幸生  
 副会長 古庄 幸一  
 理事長 齋藤 隆  
 副理事長 加藤 保  
 専務理事 赤星 慶治  
 事務局長 本多 宏隆

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者 慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸  
 理事長 柚木 文夫  
 専務理事 圓藤 春喜  
 常務理事 岩田 司朗  
 兼事務局長

株式会社 S N A

株式会社

キャリアコンサルティング

軍学堂

医療法人社団 伍光会

# 謹 賀 新 年

航空自衛隊退職者団体  
つばさ会

会長	吉田 正
副会長	外 蘭 健一朗
副会長	溝 口 博 伸
副会長	戸 田 眞一郎
副会長	片 山 隆 仁
副会長	鹿 股 龍 一
専務理事	長 島 修 照

公益財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊顕彰会

会長	杉 山 蕃
副理事長	藤 田 幸 生
副理事長	岩 崎 幸 茂
専務理事	衣 笠 陽 雄
兼事務局長	石 井 光 政

公益社団法人 隊友会

会長	藤 縄 祐 爾
理事長	先 崎 一
常務理事	増 田 好 平
常務理事	吉 川 榮 治
常務理事	外 蘭 健一朗
常務執行役	寺 田 和 典

事務局長 植 木 美知男

一般社団法人 日本郷友連盟

会長	寺 島 泰 三
副会長	森 勉
専務理事	新 井 光 雄
常務理事兼編集長	勝 木 俊 知

常務理事兼事務局長

理事	富 田 稔
理事	倉 田 英 世
理事	中 村 弘

株式会社 再生日本21

株式会社 青林堂

特定非営利活動法人  
孫子経営塾

同台経済懇話会

株式会社  
防衛システム研究所

株式会社 リエイト

## 奉 悼 三笠宮崇仁親王殿下薨去

理事長 柚木 文夫

当協議会創設以来長年にわたり、名誉総裁をお務めいただいた、三笠宮崇仁親王殿下には昨平成28年10月27日午前8時34分、聖路加国際病院において、薨去せられた。御年満百歳と10箇

月であられた。

大正、昭和、平成の激動の時代を、国民と苦楽を共にされた。取り分け、昭和天皇御崩御の後には、最年長の男子皇族として、天皇陛下を始め、皇室の御相談役、御まとめ役として、この国のため、無くてはならない御存在として重きをなされた。多年にわたる御功績と、筆舌に尽くせぬ御苦勞の跡を偲び、謹んで哀悼の誠を捧げ奉る。

殿下は、戦前の皇族として、軍人の道に進まれ、陸軍士官学校（48期）、

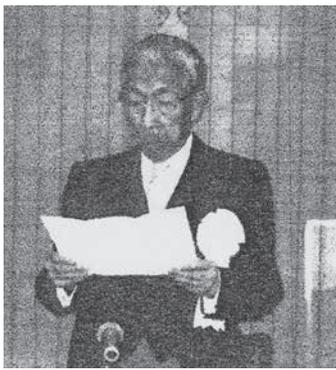
陸軍大学校（55期）を経て、支那派遣軍参謀、大本営参謀などを務められ、終戦時は陸軍少佐であられた。そのご縁もあって、平成17年7月、当大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会（当時財団法人）設立に際し、初代会長瀬島龍三氏（陸士44期）から殿下に名誉総裁御就任方をたつてお願いし、お引き受

けただいたものである。

設立総会における「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の設立は、私も旧陸軍軍人の一人として、誠に感慨深いものがあります。・・・今後、全戦没者慰霊団体が互いに力を合わせ、時代が移り変わっても、戦没者の崇敬・慰霊・顕彰の事業に貢献されますことを念願してやみません。」との、殿下の諸々の思いを籠められた含蓄のあるお言葉を、

私どもは未だに忘れることはできない。その後、毎年7月の大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭には、欠かさず御台臨を賜り、会員と共に御参拝いただくとともに、その都度、関係慰霊団体代表に対し温かい労いのお言葉を頂戴したことも、昨日のこのように懐かしく思い出される。

私自身も年に一度ぐらいの割合で、会長(初代瀬島龍三氏、二代山本卓真氏・陸士58期)と共に、赤坂御用地の宮邸を訪ねて会務報告を申し上げたが、緊張の余りコチコチになった私の説明を、穏やかな御面持ちで聞いていただいた上、時にはユーモアも交えて気さくに御談笑を賜ったこと、思い出すだに感激の至りである。



名誉総裁推戴の儀でお言葉を賜る三笠宮殿下(平成17年8月)

日を機に名誉総裁を退任したい」旨の御内意が伝えられた。そこで、引き続きの御在任をお願いすべく、山本会長とご一緒に御翻意をお願いに宮邸にお伺いしたが、「今後、周囲の人達に迷惑を掛ける仕儀となる前に退任したい」との強い御意志の程を伺い、止むなくご承引申し上げ、御前を引き下がったのであった。

殿下の御意向に従い、臨時理事会の承認を経て、平成22年12月2日をもって名誉総裁御退任の手續を終えたが、その後間もなくして、殿下の車椅子御使用のお姿を拝見することとなった。殿下の一点の曇りもない明晰な御判断と、周囲の人々に迷惑を掛けまいとされる細やかなお心配りに、改めて敬服した次第である。

殿下の明晰な御判断と強固な御意志の例として、戦時の支那派遣軍参謀時代の逸話がある。

殿下は、昭和18年1月から1年間、支那派遣軍参謀として南京の総司令部に赴任された。参謀として派遣各部隊を視察され、離任直前の昭和19年1月、総司令部佐尉官の研究會資料として殿下自らお書きになられた「支那事変に対する日本人としての内省(幕僚用)」という文書がある。この文書は50年の歳月を経て、たまたま国会図書

館保管資料の中から研究者の手によって発見され、月刊誌「JHS」で読売(平成6年8月1日発行)の特集記事「闇に葬られた皇室の軍部批判」支那事変に対する日本人としての内省」参謀・三笠宮の危険文書」というタイトルで、「殿下に独占インタビュー」の記事と共に発表されて話題を呼んだ。その内容を一読して、殿下の支那事変

の解決、引いては大東亜戦争の目的完遂に向けての並々ならぬ御決意と崇高な御見識、中国民衆への御慈愛心、更に恐れることなく、敢えて文書として発表された強固な御意志に、今更ながら感動を覚えるところである。

例えば、「支那派遣軍将兵一同が、今次事変の本質を良く理解し、公平無私の態度をもって冷静に事態を観察し、自粛自戒、適切なる大局的大乗的着眼の下に、事変解決に熱誠以て奮励しあるや否やを静かに反省するとき

に、自分は『あり』と判断する勇氣を生じないのである。…従来を振り返って『聖戦』とか『正義』とかよく叫ばれ、宣伝されるが、事実は逆に近いような気がする」自分は、大東亜戦争の現段階において、支那派遣軍の戦争目的を『速やかに中国四億の老百姓に安居樂業を与え、以て近代的に統一せる中華民國を完成する』ことに置

きたい。…即ち吾人の言う『治安』の良否とは、民衆特に農民が安居樂業し得るや否や、即ち民衆の目と声とを以て判定しなければならぬのである。」など、日中対等の目線で日中和平を希求される人間・三笠宮殿下の面目躍如たるものがある。

このような殿下の優れた御見識が全く活かされず、殿下が内地へ御転任後は、軍当局から「危険文書」として没収・焼却処分されていたことは、誠に残念なことである。

戦後の殿下は、東京大学文学部の研究生となつて歴史学者の道を進まれ、古代オリエント史を専門に研究され、「オリエンツの宮様」と親しまれた。単に學術研究の範囲に留まらず、日本オリエンツ学会、中近東文化センター、日本・トルコ協会などの名誉総裁をも務められ、国際親善に大きな足跡を残された。

また、気さくで庶民的なお人柄の殿下は、中近東史の講師として気軽に東京女子大、東京芸術大、青山学院などの教壇に立たれ、時にはラジオやテレビにも御出演になられた。東京女子大への通勤は専らJRを利用され、学食では学生らとつきつねうどんを召し上げるなど、学生に人気の宮様だった。同大のきつねうどんは、今も「宮さま

うどん」の愛称で親しまれているとのことである。

殿下はその他、ダンス、ゴルフ、登山、俳句など、御趣味も多彩で、多くの国民に親しまれ、皇室と国民の架け橋として、殿下ならではの重要な役割

を果たされた。

この度、御生前の御縁で、故殿下のお通夜（祇候の儀）、御葬儀（斂葬の儀）に参列させていただいたが、昼夜を問わず、殿下の薨去を悼む一般市民の会葬の列が、門前に、沿道に溢れて

いるのを目の当たりにし、殿下が如何に多くの国民に親しまれ、愛されておられたかを改めて実感させられた。昭和・平成の時代を通して、我が国の皇室にあつて掛け替えのない柱石となしてこられた殿下を亡くされ、今上

天皇もさぞかしお力落としのことと拝察申し上げる。誠に哀惜に堪えない。殿下が駆け抜けられ激動の時代の百年間に改めて思いを馳せ、今はただ心より殿下の御霊の御平安を祈り奉る。

合掌

### 「全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑」に参拝して

石垣 貴千代

はじめに

思いがけない御縁を頂いて、美しい慰霊碑にお参りすることができた。全国海洋戦没者の御霊を祀る伊良湖岬慰霊碑は、日本列島の中央部、眼下に太平洋を見晴らす高台の上にある。伊良湖と言えば、誰でも三河湾を抱くように伸びる渥美半島を思い浮かべるだろう。その浜辺は、島崎藤村の詩に歌われているように、南の島から椰子の実が流れ寄る浜辺なのだ。しかし、その突端に慰霊碑があることを、私は全く知らなかった。お参りすることになった切っ掛けは、今年の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」だった。その直会で「奇跡」と言うべき出遭いがあって、その席に大穂孝子さん（元聯合艦隊司令長官小澤治三郎中将の御息女）のご縁

で同席させていただいたことである。奇跡の邂逅から伊良湖へ

「奇跡の邂逅」の経過については、会報「慰霊」第38号（平成28年9月1日発行）に圓藤春喜氏が詳しく紹介されているので、その記事を是非読んでいただきたい。昭和47年11月に除幕された伊良湖岬慰霊碑の建立の経緯と第20駆逐隊指令山田雄二大佐戦死のことも書かれている。今年、碑の建立から44年、駆逐艦「夕霧」で山田大佐が亡くなって74年である。私は、只々驚きながら、山田大佐の御子息山田健雄氏と、当時「夕霧」の三番砲砲手だった

事を想像した。戦の状況は鈴木さんの「戦歴五年の体験記」に述べられている。ありきたりの言葉だが、本当に「想像を絶する」としか言いようがない。その鈴木さんは90歳。渥美半島田原市で石屋さんを営んでおられ、慰霊碑建立の際には、石の選定から全てに貢献されたと聞く。スウェーデンの石は彫られた文字が決して風化しないのだと言われた。「お元気ですね！慰霊碑を守っていらつしやるんですね！」私が言うと、「いや、守られているんです！」と即座にお返事が返ってきた。山田大佐夫人は生前、鈴木さんと面識はあったものの、御主人を茶毘に付した本人であることを全く知らなかった。夫人を良く知る大穂さん御夫妻は「くくなった部下の遺骨が還らないのに、主人の遺骨が還ってきて申し訳ない・・・。」と詫びられる山田夫人の姿が忘れられないと言われた。

「今年、追悼式当日は快晴の秋

と、当時「夕霧」の三番砲砲手だった鈴木周一氏が、頬を紅潮させて話し込まれる姿を見詰めていた。鈴木氏は命じられて、山田大佐の御遺体をショートランド島で茶毘に付し、御骨を持ち帰られたその人なのだ。戦場のガダルカナル島周辺海域から、ソロモン諸島でも北の方になる小さな島・ショートランド島との距離はかなりある。ソロモン海の地図を見ながら激戦中の出来

さん、靖國神社の直会で話し込んで

追悼式

翌11月3日、追悼式当日は快晴の秋



翩翩と翻る将官旗



伊良湖神社荒木田宮司による祝詞奏上



「太平洋戦争激戦地之地図」を前に  
(左から) 山田さん、大穂さん、筆者

耳を傾けていた時だっ  
たらうか、頬にハラハ  
ラと降りかかるものを  
感じてハツとした。水  
晶の霧のようだった。  
後で何うと、波頭が霧  
になって落ちてくるこ  
とがあるという。翻る  
将官旗も、追悼式も美  
しかった。終わって席  
を立った参会者が、久

し振りの出会いを楽しんで輪を作り、別  
れを惜しんでいた。「いいえ、いいえ(中  
将旗は預かりませんよ。来年また持っ  
て来て下さい!」と再訪を促す楽しげ  
な笑い声が後ろの方で聞こえた。振り  
返ると、宮司さんの笑顔があった。  
おわりに  
胸いっぱい思い出を頂いて、再び  
石井さんの運転で夕暮れの東名高速道  
を東京へ向かった。つくづく思う。日  
本にとって運命的だったあの戦争に命  
を捧げられた方々は、歴史を生きて今  
の我々に繋がっていらっしやる、その  
方々の心に通う道が慰霊なのだ。そ  
して日本の未来は、この道の方位にし  
かないのだということを改めて思うの  
である。  
最後に忘れられない学生さんの言葉  
を引きたい。ある戦没学生の遺稿をク  
ラスで読んだ時の感想である。「・・・  
あの戦争を私は外国人の目で見たい  
ことに、今気が付きました。」という  
のだ。戦後を主導した否定的な言論の  
悪影響を的確に指摘する言葉だった。  
これから日本を担う若い方々に、日本  
人の誇りを持って頑張って下さいと心  
からお願ひする。  
秋風や伊良湖の潮巻き返し  
爽籟に御霊還るや慰霊祭  
(平成28年11月3日詠)

日和だった。全ての海洋戦没者を弔う  
慰霊の墓所は、国定公園の丘を背負う  
高台にあって、追悼式の準備の中に華  
やいでいるようであった。慰霊碑の建  
立は、最後の聯合艦隊司令長官だった  
小澤治三郎中将が昭和44年11月に亡く  
なられた折、天皇陛下からの御下賜金  
を御遺族が「潮会」に寄付されたのを  
基に計画されたのだそうだ。当初、機  
動艦隊戦没者を慰霊する碑として計  
画・建立されたが、現在は更に広く全  
海洋戦没者、民間全死亡者を併せて追  
悼する所となっている。沖繩からの疎  
開児童を乗せた「対馬丸」の撃沈は忘  
れることができないが、その犠牲に  
なった子供達もここに祀られている。

「君 今ここに甦る」という桑原幹  
根愛知県知事の碑文が、秋晴れの陽を  
受けて輝いていた。平成23年に伊良湖  
岬慰霊碑奉賛会が解散してからも、毎  
年11月3日の追悼式は、地元の有志の  
方々のご尽力で必ず斎行されてきたの  
だそうだ。大穂さんは「こんなに綺麗  
に手入れされて!」と何度も繰り返し  
言われた。背後の木々も足元の雑草も  
刈り込まれ、植えられた松が美しい。  
高松宮喜久子妃殿下の慰霊碑建立10周  
年・20周年に詠まれた歌碑があった。  
20周年に際しての御歌を次に記す。  
惜しみても 惜しみてもなほ  
あまりあり 今しこの世に  
君等ありせば

歌碑の傍らに「太平洋戦争激戦地之  
地図」という標識があり、テーブルの  
ような石の台が置かれていた。表面は  
地図だった。手前が日本列島、そして  
東はアリューシャンから西はインドシ  
ナ、南はオーストラリアに至る海域が  
示されていて、戦没者の数が記入され  
ていた。硫黄島もサイパンもペリ  
リュー島もラバウルも、そして遠くソ  
ロモン諸島ガダルカナルを指で確認し  
て、思わず目の前に広がる太平洋に見  
入った。両手を大きく広げれば、戦死  
された方々がその中に入るような気が  
したのだ。同胞の死が、これほど近くに  
あることを感じたのは、初めてだった。  
午後1時に、今年第45回になる全国  
海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式が、  
荒木田健伊良湖神社宮司によって斎行  
された。司会は自治会長さんである。  
自治会長さんは氏子総代6年目と挨拶  
された。地元の方々の協力で維持され  
ていることが良く分かる。今年の追悼  
式では、国旗と軍艦旗に加えて、大穂  
さんが持参された小澤長官の中将旗が  
慰霊碑の掲揚台に掲げられた。祝詞に

耳を傾けていた時だっ  
たらうか、頬にハラハ  
ラと降りかかるものを  
感じてハツとした。水  
晶の霧のようだった。  
後で何うと、波頭が霧  
になって落ちてくるこ  
とがあるという。翻る  
将官旗も、追悼式も美  
しかった。終わって席  
を立った参会者が、久  
し振りの出会いを楽しんで輪を作り、別  
れを惜しんでいた。「いいえ、いいえ(中  
将旗は預かりませんよ。来年また持っ  
て来て下さい!」と再訪を促す楽しげ  
な笑い声が後ろの方で聞こえた。振り  
返ると、宮司さんの笑顔があった。  
おわりに  
胸いっぱい思い出を頂いて、再び  
石井さんの運転で夕暮れの東名高速道  
を東京へ向かった。つくづく思う。日  
本にとって運命的だったあの戦争に命  
を捧げられた方々は、歴史を生きて今  
の我々に繋がっていらっしやる、その  
方々の心に通う道が慰霊なのだ。そ  
して日本の未来は、この道の方位にし  
かないのだということを改めて思うの  
である。  
最後に忘れられない学生さんの言葉  
を引きたい。ある戦没学生の遺稿をク  
ラスで読んだ時の感想である。「・・・  
あの戦争を私は外国人の目で見たい  
ことに、今気が付きました。」という  
のだ。戦後を主導した否定的な言論の  
悪影響を的確に指摘する言葉だった。  
これから日本を担う若い方々に、日本  
人の誇りを持って頑張って下さいと心  
からお願ひする。  
秋風や伊良湖の潮巻き返し  
爽籟に御霊還るや慰霊祭  
(平成28年11月3日詠)

ビルマ(現ミャンマー)の  
防衛作戦と慰霊③  
— インパール作戦後 —  
専務理事 圓藤 春喜

一 はじめに

「連合軍反攻拠点のインパールを略し、英印軍の機先を制し、ビルマの防衛を容易にする」目的で昭和19年3月に開始されたインパール作戦であったが、当初予定の作戦期間(約1ヵ月)を過ぎても作戦目的を達成できなかった。

5月下旬からの雨季の訪れとともに部隊の補給はますます困難になり、食料・弾薬の不足と疾病の蔓延、英印軍の反攻の激化から各部隊の戦力は急速に低下しつづであった。

このような状況下で、6月上旬に第31師団の独断撤退があり、7月初頭には第15軍はインパール作戦の中止を余儀なくされた。

以下、インパール作戦中止後のビルマ防衛作戦について紹介する。

二 インパール作戦中止時の態勢

この時点でのビルマの各正面の状況は、次のようであった。

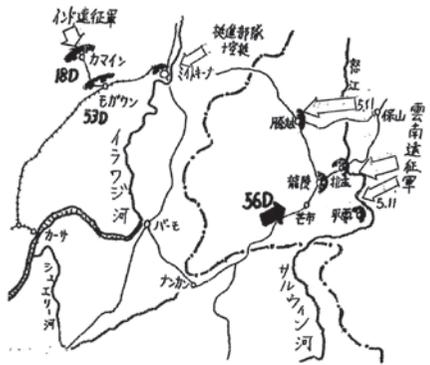


図1 第33軍正面の状況

1 第33軍正面(フーコン、雲南方面)  
第33軍正面は、7月上旬には図1のようにフーコン河谷では、第18師団がカマイン付近の最終阻止陣地において、ステイルウエル中将指揮のインド遠征軍(2個師団基幹)を遅滞中であり、その南方モガウン付近には收容援護のため、第53師団が陣地を占領していた。

また、北部ビルマの要衝ミイトキーナは、1個聯隊基幹(実質1個大隊)の守備隊が防衛していたが、5月中旬に米支軍の挺進攻撃があり、守備隊は、米支軍挺進攻撃部隊とその後増援された空挺部隊の数次にわたる包囲攻撃を撃退し、拠点陣地を確保していた。

一方、雲南正面では、インパール作戦の帰趨を見極めた蒋介石が、ルーズベルト大統領の再三の要請に応じ、5月上旬に反攻開始を決定、雲南遠征軍は、5月11日から怒江を渡河して攻勢を開始した。

第56師団は、進攻する雲南軍を数次の攻勢作戦により阻止していたが、15対1とも言われた戦力差は如何ともし難く、逐次損耗が増大し、7月上旬には怒江西岸地区の守備に任じていた拉孟・騰越・平夏守備隊を敵中に孤立させたまま、戦線を龍陵付近に収縮せざるを得なくなっていた。

各守備隊は、敵の包囲下で数次にわたる攻撃を撃退し、辛うじて拠点陣地を確保していた。

2 第15軍正面(インパール正面)

前号で紹介したように、6月上旬に独断撤退した第31師団は、下旬にはウクルルに到着したが、ここにも補給品はなく、引き続きフミニネに向かい撤退中であった。第15師団は7月16日に、第33師団は7月10日に軍命令に基づき攻勢時使用した経路を使ってチンドウイン河西岸地区に向かい撤退を開始した。

3 第28軍正面(アキャブ正面)

ベンガル湾沿いの英印軍の進攻は、比較的緩慢で、第55師団もって概ね国

境付近を確保していた。

三 方面軍人事の刷新(異動分のみ)

インパール作戦中止後、方面軍、第15軍の主要指揮官・幕僚は、次のように刷新された。

司令官 河邊正三中将から木村兵太郎中将へ  
参謀長 中永太郎中将から田中新一中将へ  
第15軍

司令官 牟田口廉也中将から片村四八中将へ  
参謀長 久野村桃代中将から吉田權八少将へ

第15師団長 山内正文中将から柴田刃一中将へ  
第31師団長 佐藤幸徳中将から河田植太郎中将へ

第33師団長 柳田元三中将から田中信男中将へ(攻勢作戦時に交代)

四 インパール作戦中止後のビルマ方面の態勢整理

1 インパール作戦中止直後に南方軍から与えられた任務

① インパール方面の敵に対し、チン

ドウイン河畔以西において持久  
 ② 怒江西岸及び北部ビルマ地区にお  
 いて敵の印支連絡線を遮断  
 2 ビルマ方面軍の作戦構想  
 南方軍の命令に基づき、方面軍が示  
 達した作戦構想(要旨)は、次のとお  
 り。

① 怒江西岸地区に攻勢を取り、騰越  
 を確保して、印支地上連絡企図  
 を破碎。第2師団を第33軍に増強。  
 ② フーコン方面の戦線から撤退し、  
 インドウ北方地区において敵を阻  
 止。

③ インパール方面の戦線から撤退  
 し、インドウ付近に連接して、ジ  
 ビュー山系からカレワ付近の線にお  
 いて、アラカン方面から進攻する敵  
 を阻止。1個師団をマンダレー付近  
 に集結。

④ 南西沿岸正面は、アキヤブ以遠確  
 保の任務を軽減し、バセイン地区の  
 防衛を強化。  
 3 各方面の作戦経過(昭和19年7  
 9月)

① 第33軍正面(北部ビルマ方面)  
 軍は図2のように8月下旬、2個師  
 団(第56・第2師団)実戦力は、1個

聯隊程度)をもって攻勢を開始し、ま  
 ず雲南軍の重圧を受けている龍陵守備  
 隊を救出、次いで敵の重囲下にある拉  
 孟・騰越・平戛の守備隊の救出を企図  
 した。

軍は、龍陵の救出には成功するが、  
 雲南軍の抵抗に阻まれ、他の守備隊を  
 救出することはできず、9月7日には  
 拉孟守備隊、次いで9月14日には騰越  
 守備隊が玉砕した。

軍は、残る平戛守備隊の救出に注力  
 し、9月22日救出に成功、爾後遅滞行  
 動に移行し、引き続き印支連絡線の遮  
 断に努めた。

フーコン正面の第18師団は、退路を  
 遮断される危機に陥りながらも、離脱  
 に成功し、7月上旬に第53師団の掩護  
 下に入り集結した。

ミイトキーナ守備隊は、米支  
 軍の攻撃に良く耐え、7月末ま  
 で陣地を固守していたが、守備  
 隊の指揮官であった水上少将

は、8月1日、これ以上の確保  
 は困難と判断し、守備隊に脱出  
 を命じるとともに、自らは死守  
 命令(水上少将は、ミイトキー  
 ナを死守)に基づき、従容とし  
 て自決された。

守備隊主力は、敵重囲の間隙  
 から脱出に成功、9月15日には

バーモに到着し、第18師団の指揮下に  
 入った。

爾後、第33軍は、第56師団をもって  
 雲南正面を、第53師団をもってイラワ  
 ジ河畔正面を担当させ、敵の進攻遅滞  
 を図りつつ、ラシオ地区に向かい戦線  
 を整理していった。

② 第15軍正面(西部ビルマ方面)

第15軍の各部隊は、図3のように攻  
 勢時進撃した経路を使用して撤退し、  
 8月中旬頃にはチンドウイン河西岸地  
 区に集結した(1次撤退)。

次いで、軍の2次撤退命令に基づ  
 き、各部隊は、8月下旬にチンドウイ  
 ン河を渡河して東進し、10月下旬頃に  
 イラワジ河西岸のシュエボ地区で、主  
 力に先立って撤退した第31師団の掩護  
 下に入り、戦力回復に努めた。

雨季最盛期の各部隊の撤退は、道路  
 の泥濘化、河川の濁流化、敵の航空攻  
 撃等により難渋を極め、追撃する英印  
 軍との戦闘、航空攻撃、飢餓、疾病の  
 蔓延、河川渡河時の遭難等により、多  
 くの将兵を喪った。

③ 第28軍正面(ベンガル湾方面)

雨季間の英印軍の大規模な動きはな  
 く、戦線は比較的静かであった。

4 方面軍の戦力回復

インパール作戦後、特に損耗の激し  
 い第15軍の3個師団を重点として、人  
 員6万人、3個師団分の兵器  
 4万5千トンの資材の補給が計画され  
 たが、海路、空路とも連合軍の航空攻  
 撃に妨げられ、昭和19年6〜10月の間  
 に到着し得たのは50%程度に過ぎな  
 かった。これらの補充員は、後方連絡



図2 第33軍の作戦経過

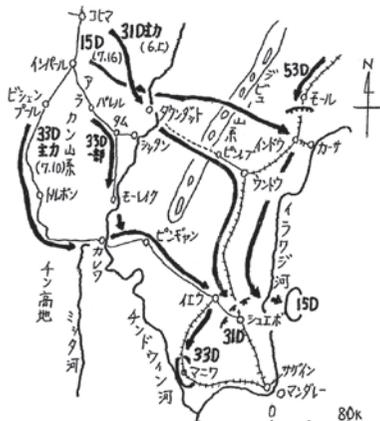


図3 第15軍の後退行動





始、逐次の抵抗により第15軍の後退を掩護するとともに、ピンマナ以北に敵の遅滞を企図した。

方面軍は、この間に第15軍をシャン高原内を南下させ、トングー陣地に配備するとともに、第55師団を増援し、トングー付近で敵を阻止し、ラングーの確保を企図した。

しかしながら、雨季到来前にラングーの奪回を目指す英印軍の追撃は急で、第15軍・第55師団主力の移動も遅れたため、トングー付近での堅固な防御陣地の構築は間に合わず、4月22日にはトングー陣地が突破された。

方面軍は、最早ラングーの防衛は困難と判断し、23日には司令部をサルウイン河口口のモールメンに移動するよう命じた。

ラングーは、1個混成旅団が守備していたが、英印軍の突進を阻止することはできず、5月2日には英印軍の占領するところとなった。

第33軍・第15軍は、トングー陣地を突破されて以降、シャン高原とシタン河東岸を南下、雨季入り前の5月上旬中旬の間にシタン河河口東岸に集結することができた。

爾後、第15軍は、タイ・インドシナへの移駐を命じられ、6月に行動を開始し、ビルマ戦線から離脱した。

一方、アラカン山系とイラワジ河口平地で敵を遅滞させていた第28軍は、4月下旬には退路を遮断されたため、一旦ペグー山系に集結、機を見てシタン河を渡河することにし、4月下旬から撤退を開始した。イラワジ河西岸地域に展開していた第54師団主力は、5月上旬から下旬にかけてイラワジ河をカマ付近で強行渡河し、7月中旬頃までにペグー山系に集結を完了した。

第28軍は、6月下旬の方面軍の東岸モールメン地区への撤退命令に基づき、渡河準備を推進し、7月下旬に敵の警戒網をかくぐり、雨季に入り濁流化したシタン河を地元の舟や竹筏等を利用して渡河し、東岸に集結した。この渡河間に、多くの将兵が濁流にのまれ、第28軍の兵力は3万4千人から1万5千人に減じた。

爾後、軍主力はモールメン地区に向かい南下中に終戦を迎えている。

ビルマ方面軍の残存兵力8万人は、図6のようにシタン河東岸からタイ国境西部のテナセリウム地区に押し込められた状態で終戦を迎えた。

終戦後は、ビルマ各地の收容所に收容され、劣悪な条件下で強制労働を課され、この間に亡くなった方も多数に上ったと言われている。

收容所の処遇については、故会田雄

次氏の名著『アロン收容所』に詳しく書かれているので参照されたい。

### 七 戦没者の慰霊

#### 1 ビルマの戦いにおける戦没者と遺骨収集の状況

ビルマの全ての戦い（インパール作戦のインド国内分を含む。）における日本軍の参加兵力、戦没者、遺骨収集等は次表のとおりであり、收容遺骨の内約8万余は、引揚げ時に戦友等が持ち帰ったものである。

戦後、ビルマ政府が鎖国政策をとったため、ビルマにおける遺骨収集は、しばらくできなかつたが、昭和31年に再開され、政府、戦友遺族会等が3万5千余柱を收容帰還させている。

その後、クーデターによる軍事政権樹立の影響で一時中断していたが、昨年の民政移管により国交が正常化し、遺骨収集も少数民族地域から復活の方向にあるので、今後は全土に拡大すると思われる。

#### 2 戦没者の慰霊

戦後しばらくの間は、各部隊ごとに結成された戦友遺族会が慰霊碑の建立、慰霊行事を実施して、戦没者を慰霊していた。この間に戦友遺族会が建立した慰霊碑は、ビルマ（現ミャンマー）全土で124基確認されている

参加兵力	303,501名
帰国者等	136,501名
戦没者	167,000名
内 收容遺骨	111,360柱 (約7.8万柱は引揚時帰還)
未收容遺骨	55,640柱

注：資料源はH28厚労省資料による。戦史叢書では、戦死者：185,149名、帰国者：118,752名となっている。

が、そのうち107基が住民により良好な状態で維持されている。

政府は、昭和56年にビルマ政府の協力を得てヤンゴン市内に「ビルマ平和記念碑」を建立、ビルマ国内の戦没者13万7千名を慰霊している。

戦後長く慰霊行事を実施していた戦友遺族会は、その後会員の高齢化等により逐次整理統合され、現在は、一般社団法人「全ビルマ会」を中心として、靖國神社とラングー（現ヤンゴン）の日本人墓地の国立慰霊碑で慰霊祭を斎行するとともに、戦跡の慰霊巡拝を実施し、戦没者を慰霊している。

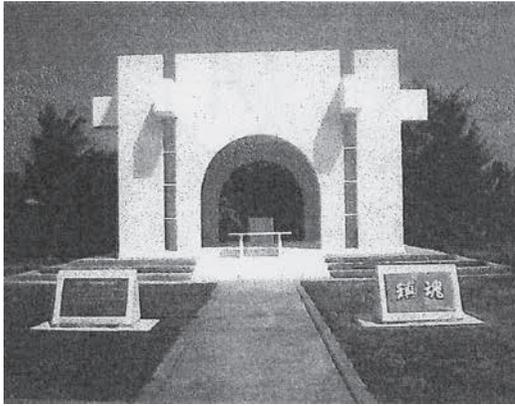
なお、インド側については、インパールのあるマニプル州が長く入城

が制限されていたため、戦友遺族会が建立した慰霊碑は2基が確認されているに過ぎない。

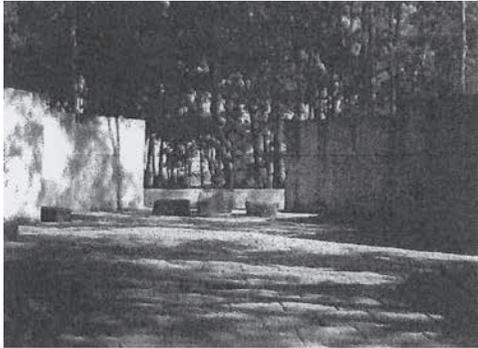
政府は、平成6年になってインパール南郊（レッドヒルと呼ばれた激戦地）に国立の「インド平和記念碑」を建立し、3万名の戦没者を慰霊している。

## 八 結語

「ビルマ防衛作戦と慰霊」について3回にわたり紹介したが、今回の研究で痛感したことは、「日本軍将兵の精強さ」であった。



ビルマ平和記念碑



インド平和記念碑

マウントバットン將軍を中心に戦友会を結成し、長く当時を偲んでいたが、語り継がれたのは、「日本軍は強かった」という言葉であったという。

ビルマ戦没全將兵にこの言葉を捧げて、この稿を終えることとする。

## 凍星の祈り―奇跡の生還

札幌市 佐藤 茂市

「編注・本稿は、公益財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会刊『千鳥ヶ淵』第516号（平成27年11月）、第517号（平成28年1月）、第518号（平成28年3月）に連載されたものであるが、お許しを得て転載させていただいた。」

◇

昭和20年、間もなく20歳になろうとしていた私は、当時の満洲国、南満洲鉄道株式会社社員として、本社のある大連市奉天電気区に勤務していました。しかし、折柄の戦況悪化のため、その年の6月、1年繰り上げの現役兵として、満洲の東寧師団野砲大隊第三中隊に召集されました。そこは、国境最前線の守備隊でした。ドイツ軍を破ったソ連軍は、続々と満洲国境に集結しており、監視兵の情報によると、「間もなくソ連軍が国境線を侵攻するだろう」とのことでした。激しい緊張の毎日でした。

8月9日の朝、「遂に侵攻された」との報に、私たち野砲第三中隊は、中隊長の命令に従い整列、先に並んだ先頭から半分までの者たちは勾玉山陣地

へ、残りの半分の者たちは三角山陣地へと赴くことになったのです。従来の訓練どおりに、班長の寝具を整えていたために整列が遅くなった私は、三角山陣地です。野砲を載せた軍馬を必死に牽引して、辿り着いた三角山から市街を見下ろしたところ、既にソ連軍の長距離砲によって師団司令部を始め、周辺には火災が発生し、天高く炎上していたのです。私は、三角山と勾玉山の間に通信用線を構築するために、上級兵と共に軍用通信線を背中に担ぎ勾玉山に急ぎました。しかし、勾玉山は、敵軍の砲撃が炸裂して激しく土煙が上がつていました。それでも、竹林の中を懸命に架設しながら進み、何とか勾玉山陣地に到着したところ、私が所属する三分隊班長の土谷軍曹が、慈愛に満ちた笑顔向け「佐藤、ご苦労さん、元気でやれよ」と声をかけて、労ってくれたのです。土谷軍曹とは、これが今生の別れとなりました。

架設を終えた通信回線の端末を引き渡して、私たちは再び三角山陣地へ戻りました。ところが、戻ってみると陣地の様子がどうも異様なのです。私は、野砲を台座から取り外しながら、上級兵に何が起きたのかを聞きましました。すると「師団司令部から命令があり、国境最前線の各隊は速やかに後方

の第二線陣地まで撤退せよ」とのこ  
と、後方の第二線陣地が、何処にある  
のかも分からないまま、援軍の歩兵部  
隊を含む全軍が敵の照明弾が炸裂する  
中、撤退を始めました。後で分かった

ことですが、この時の命令は勾玉山陣  
地には届かず、歩兵部隊を含む勾玉山  
の750名程の全員が玉砕してしまっ  
たのです。もしも、あの時、僅かでも  
早く整列していたなら、今の私は、こ  
の世に在りませんでした。

その後、仮設の林道をとにかく行進  
し続けました。林道を抜けると、ソ連  
軍の銃撃が絶え間なく続くので、昼間  
は林の中に待機して、日が暮れてから  
夜通し行進するという変則的な方法に  
なりました。橋は既に爆破されている  
ために、深い川水に浸りながらの行進  
で、足はひどい水腫れになっていまし  
た。夫たちが臨時に召集されたであろ  
う開拓団の主婦たちは、赤子を背負  
い、幼児の手を引いて、行き先も分か  
らぬままに髪を乱して、裸足で歩を進  
めていました。その様は、本当に悲惨  
そのものです。しかし、どうする事も  
出来ないのです。空腹と喉の渇きは限  
界を超え、沢から流れる清水を見つけ  
た時は、貪るように飲み続けました。

ある日、突如「ソ連軍の戦車が後方  
に3両現れた」との情報で、対戦を準備

中に「更に50両が進撃」と判明。分  
散の体制に移った途端、両軍の重砲撃  
戦が始まったのです。ソ連軍の自動小  
銃弾、戦車砲弾が炸裂して周囲に雨霰  
のごとく激しく降り注ぎます。

体を伏せますが全く動かすことがで  
きません。爆風が服を裂き千切り、恐  
怖で硬直したままの私は、ずっと「お  
母さん、お母さん！」と叫び続けてい  
ました。

それは一体どれ程の時間だったの  
か、やがて周囲が静まり、中隊の仲間  
数人が集まって来ました。その中の3  
年兵の一人が、私に「先程の戦闘場所  
の様子を見てくるように」と命じたの  
です。初年兵の役目として、私は怯え  
ながらも仕方なく小銃に実弾を込めて  
身を屈めながら偵察を始めました。百  
メートル程も進んだでしょうか、突如  
人影が見え、大声が聞こえてきたので  
す。なんとそこには、ソ連軍兵士が小  
休止していたのです。仰天した私は、  
とっさに傍らのトウモロコシ畑に飛び  
込み、身を隠しました。全く動くこと  
ができません。やがて、そのまま夜に  
なり、北斗星がひと際輝いています。  
これからどうしたらよいか・・・。

このまま此処に留まって夜が明ければ  
ソ連軍にやられてしまう。ともあれ、  
静かに移動しなければ・・・しかし、

どちらに進めば良いのか・・・。北斗  
星を見ながら考えましたが、分かりま  
せん。結局、2本あった道の左端を選  
んで深夜に歩き始めました。緊張と恐  
怖で空腹など全く感じませんでした。

東の空が白み始めた頃、道に小さな  
乾パンがポツン、ポツンと落ちていま  
るのを見つけてそれを食べながら進みま  
した。兵士が所属部隊から離脱するこ  
と、すなわち、それは「死」を意味し  
ています。歩く道すがら、倒れて冷た  
くなっている兵士たちの姿がありまし  
た。余りの無惨な光景に私の神経もマ  
ヒしていたように思います。

2日程歩き続けているうちに、奇跡  
的にも野砲第三中隊に合流できたので  
す。隊の仲間は、私が戻るとは思わな  
かったのでしょうか、「お前、生きてい  
たのか？」とひどく驚かれたものでし  
た。8月15日以降はソ連空軍の飛来が  
なくなりませんでした。その時はまだ終戦を  
知りませんでした。8月20日頃になっ  
て、「日本は無条件降伏した」という  
情報が入ってきました。先任下士官が  
道に座り込みながら涙を流していまし  
たが、私は心の中でホッとしていまし  
た。どんな苦境のときでも、生きて帰  
りたいと強く願っていたので、戦争が  
終わりで、これでもう死ぬことはない  
と安心したのです。8月23日、北満の牡

丹江、東京城付近で武装解除になりま  
した。この時、ソ連の女性通訳が日本  
語で「皆さん、戦争は終わりました。  
東京に戻りますので有蓋貨車に乗って  
ください」と言ったのです。私達は、  
喜び勇んで乗車しました。しかし、到  
着したところは、シベリア、ハバロフ  
スク市だったので。

夜更け、暗闇の中、私たち4百名程  
の将兵は、ハバロフスク市の山奥にあ  
る丸太小屋に収容されました。もちろ  
ん、電気も水道も便所すらもありません。  
その日から、夜に、1回だけの僅  
かな食事が与えられ、伐採や運搬作業  
が始まったのです。将校は、国際条約  
により労働を免除されていました。下  
士官以下の兵士たちは、自分の階級を  
誇示するため、絶対に襟からバッジを  
取り外すことはありませんでした。11  
月になると、冬將軍が到来。この寒さ  
は満洲の比ではありません。「衣食住  
足りて仁を知る」という言葉がありま  
すが、このような劣悪な環境での、1  
日1回だけの食事では、人間が人間で  
はなくなくなってしまおうのでしょうか。弱肉  
強食が横行して初年兵の私の食事が盗  
られてしまい、食べられないことが  
度々ありました。そうしているうちに  
に、疲れ果てた夏服の私は、遂に歩行  
困難となり、小用もたせない状態に

に、疲れ果てた夏服の私は、遂に歩行  
困難となり、小用もたせない状態に

陥ってしまったのです。11月下旬、ハバロフスク市内の学校の運動場に仮設された日本兵専用病院に収容されました。ここでは、治療も投薬もなく、只々、寝ているだけなのですが、1日に3回、小さな黒パンとスープが支給されました。若かった私は、寝ているだけでも徐々に体力が回復し、元気を取り戻すことができましたが、年配の兵士は毎日のように、何人かが亡くなっていきました。少し身体を動かすことができるようになった頃、倉庫に積まれた日本兵の遺体をトラックに積み込むという使役を与えられました。全ての遺体が、裸のまま目を見開き、無念を表しています。足にはロシア語で何か書かれています。そして、日本兵によって掘られた穴の中に葬られるのです。ここに、1ヵ月程入院して、別の収容所に移動させられました。この収容所では、一般雑用、水汲み、ソ連軍兵舎の掃除を課せられましたが、それほど重労働ではありませんでした。

さらに、1ヵ月後には第18収容所に移動させられました。ここには、4百名程の兵士がおり、四つの中隊が編成されていました。建物の周りには、鉄条網が張り巡らされ、望楼には、自動小銃が取り付けられ、夜間にはライトが灯っていました。武装した監視兵

が、24時間常駐する中、農作業、建築作業、貨車からの雑穀や石炭の降ろし作業、パン工場での作業、水道管を敷く穴掘りと多岐にわたる労働が課せられていました。作業場所は、前日の夜に、各中隊の下士官に指示されます。最も辛い労働は、貨車から50トンの石炭を降ろす作業とパン工場の雑穀類の運搬作業です。私は、この石炭降ろし作業と水道管を敷く穴掘りが定番となっていました。休憩中でも一切水を飲むことができません。監視兵たちは「日本のミカドが降伏したのだから、25年間の労働は当たり前」と、口々に言っていました。ソ連軍が、不可侵条約を破棄して侵攻し、拳げ句の果てには、シベリアに連行。この理不尽な行動に対して他の戦勝国は、只、傍観するばかり。「勝てば官軍、負ければ賊軍」なのです。これでは、生きて日本の土を踏むことは到底、不可能だと思わざるを得ません。でも、大勢の仲間が、同じ条件の下に居ると思うと、不思議とそれ程の悲壮感を持たずにいることもできました。

それは、一層強まるばかりです。おそらく、誰もが同じ想いだったことでしょ。常に空腹で、道端のレンガが黒パンに見える幻覚が幾度もありました。昭和22年1月、私は、夜の7時から朝の2時まで、火力発電所のベルトコンベアに石炭を投げ込む作業を課せられました。厳冬の屋外は身を切るような寒さです。防寒服にびっしりと氷の花が咲くのです。夜の10時を過ぎると、寒さは更にまして、作業員は皆、唸り声を上げ始めるのです。声を出さずに黙っていると凍ってしまうのです。凍てつく空を見上げると、そこには、満天の星、輝く星を見つめながら、それでも、いつかは帰りたいとの想いは、かなわぬことなのか・・・。本当に辛く切なかつた。3月のある日、夜間の作業を終えて収容所で休息を取っていると、突然、ソ連の医師団がやって来て、身体検査を始めたのです。素っ裸になり、肉付きなどを調べられました。夕刻、その結果が発表され、名前が呼ばれた15名には、日本への帰国を許可すること。その中に、私の名前がありました。たまたま、私に貸せられた作業が夜間であったため、身体検査が実施された日中はその場にいました。日中の作業を課せられた者たちは、当然その時は不在です。私は言葉で表せない運命的なものを感じましたが、それは恐ろしい程でした。それでも、半信半疑のまま、トラックと列車を乗り継いで日本海に面したナホトカ港に着く頃には、もしかしたら、帰国できるかもしれないと思いつめていました。ナホトカの収容所には、各地からの帰国予定兵が屋外まで溢れ返っていました。その屋外の一団が、余りの寒さに小屋を壊し、燃やして暖をとったのがソ連側に見つかり、元の労働収容所に戻されるということもありました。

その収容所で2日ほど経った早朝、「今日、日本からの迎えの船が入港する」との報が入ったのです。私達1千8百名程は隊列を作り、目を凝らしながら沖合を見つめていました。「遠くに黒点が見える！船のようだ！」との誰かの叫び。その黒点が、だんだん大きくなってきます。船です。遂に、遂に、日本からの引揚げ船、信洋丸7千トンがやってきました。船尾には日の丸があります。乗組員は全員、日本人です。船が岸壁に横付けされ、10名ずつが無我夢中で乗り込みました。全員が乗船し終わったと同時に、ハッチが閉じられ、とうとう船が岸壁を離れました。その時の気持ちは、何と表現して良いかわかりません。手を

振るソ連の高官の姿がだんだん小さくなる中、何人もが「バカ野郎、バカ野郎！」と叫び続けていました。

4月8日、日本の山々が次第にその姿を大きくして、遂に船は舞鶴港に入港したのです。舞鶴援護局で復員手続きを行い、復員証明書と、金2百円が支給されました。そして夢にまで見た故郷、北海道行きの列車に乗ったのです。途中、京都の嵐山では桜が満開でした。悲しい程に美しい桜です。次々と車窓に移ろう桜を、私は魂の抜け殻のように、只ぼんやりと眺め続けていました。

上野駅ホームの電信扱所で、「十二ヒ、アサツク、サトウモイチ」との実家宛の電報を依頼しました。津軽海峡を越え、北海道に渡ってからの列車は、各駅に停車毎に、夜中であっても、婦人の方々が、私達にお茶を配る奉仕をしてくれました。4月12日午前5時15分、岩内駅に到着。まだ夜の明けきらない薄暗闇の中を兄の清茂と弟の清治が、走って迎えに来る姿が見えました。二人に向かい「只今、帰りました」と敬礼。遂に、悲願の帰還が叶ったのです。「茂市はもう帰って来ないだろう」と諦めていたらしい父は、前年に病逝していました。迎えてくれた母が、焼いた春鯿を食した後、銭湯に行き、

鏡に映った自分の全身を見て、私は驚きました。骨と皮だけに痩せ細った体に、浮き立つ血流だけが、透けてはつきりと見えるのです。その夜から、私はひどい高熱を出して昏睡状態に陥ってしまいました。私の名を呼ぶ兄の声で目覚めるものの、全身から湯気が立ち、起き上がることが出来ません。1週間程生死を彷徨っていたようです。

岩内協会の病院で急性肺炎と診断され、栄養補給と十分な休養を取るよういわれ、兄は高価なママシ酒を飲ませてくれました。家族の手厚い介抱のおかげで、私は少しずつ元気を取り戻していましたが、すっかり回復するまでに半年程を要しました。

体調が回復した私は、昭和23年国鉄に就職、昭和27年には、同郷の幼馴染みと結婚をしました。7箇所の勤務を経て、昭和56年、定年により退職しました。その間、過労により体調を崩し、休職を余儀なくされた時期もありましたが、二人の子供に恵まれ、つつましくも穏やかで、心豊かな暮らしを営むことが出来ました。平成24年には、子供と孫による米寿の祝いに招かれ、その際、念願であった千鳥ヶ淵戦没者墓苑への参拝にも行くことが出来ました。90歳を目前にし

た私のこの命は、誰かが生きたかった命でもある、ということをしみじみと思います。享年65歳で病逝した妻への供養と、若くして逝った仲間達、今も、シベリアの凍土の下に眠る英霊の鎮魂を祈り、読経を捧げることが、私の日課となつています。やがて、私もこの世を去る時がやってきます。あの世で再会する仲間達は、「佐藤、やっぱりお前は来るのが遅いなあ」と笑って迎えてくれるでしょうか。

先駆けて 散りし戦友よ 我来たるシベリヤ生還 墓苑に頷づく 千鳥ヶ淵にて

### 事務局からの報告等

#### 一 平成28年度臨時理事会の開催

平成28年10月26日（水）、当協議会会議室において、平成28年度臨時理事会を開催した。

本会議では、事務局からの提出議題等について、熱心な討議が交わされ、議案はそれぞれ原案どおり承認された。

#### 1 議案

○第1号議案―平成28年度上半期の財産運用の経過と結果報告及び今後の財産運用について

○第2号議案―平成28年度上半期職務

執行状況（報告）  
○第3号議案―平成28年度上半期予算執行状況（報告）  
○第4号議案―指定法人の設立と職務執行状況（報告）

2 出席者  
理事11名中10名及び監事1名が出席した。

二 平成28年度第2回慰霊諸団体連絡会議の開催  
平成28年12月7日（水）、靖国会館

「玉垣の間」において、平成28年度第2回慰霊諸団体連絡会議を開催した。  
本会議では、遺骨収集帰還事業推進法に基づく指定法人の設立、事業計画、同法人の今後の事業運営についての要望等について、活発な意見交換が行われた。

#### 三 慰霊祭等への参加状況

1 市ヶ谷台慰霊祭  
平成28年9月21日（水）、市ヶ谷台

駐屯地メモリアルゾーンにおいて、借入社主催の慰霊祭が執り行われ、当協議会から柚木文夫理事長が参列した。

#### 2 第65回特攻平和観音年次法要

平成28年9月22日（木）、世田谷山観音寺・特攻観音堂において、同観音寺主催による第65回特攻平和観音年次法要が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

3 靖國神社秋季例大祭

平成28年10月18日(火)、靖國神社秋季例大祭が斎行され、当協議会から圓藤専務理事が参列した。

4 平成28年度千鳥ヶ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭

平成28年10月18日(月)、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、同墓苑奉仕会主催による平成28年度秋季慰霊祭が執り行われ、当協議会から柚木理事他2名が参列した。

5 第33回大東亜戦争戦歿全学徒慰霊祭

平成28年10月23日(日)、靖國神社において、同実行委員会主催による第33回大東亜戦争戦歿全学徒慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤専務理事が参列した。

6 全国ソロモン会慰霊祭

平成28年10月30日(日)、靖國神社において、同会主催による全国ソロモン会慰霊祭が執り行われ、岩田司朗常務理事が参列した。

7 ソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭

平成28年11月3日(木)、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、ソ連強制抑留戦友会・東京ヤゴタ会主催によるソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭が執り行われ、当協議会から岩田常務理事が参列した。

8 慶應義塾戦没者追悼会

平成28年11月12日(土)、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにおいて、慶應義塾戦没塾員追悼会が執り行われ、圓藤専務理事が参列した。

四 硫黄島遺骨帰還通常派遣事業への参画

平成28年度第2回派遣(9月28日～10月12日)に、隊友会から2名、第3回派遣(11月22日～12月7日)に、つばさ会から2名が、いずれも当協議会からの派遣団員として参加し、御遺骨の収容に献身されました。気温摂氏60度以上の高温多湿、狭い洞窟内での収容作業で、体力の消耗が著しく、大変御苦労されたとのこと、お疲れ様でした。

今後の予定として、平成29年1月に第4回派遣が計画されております。

新入会員(敬称略)

(平成28年8月1日～11月30日)

【賛助会員】(五十音順)

- 東 威 志 池 田 聖 一
- 市 野 保 己 岩 田 清 文
- 加 来 仁 信 金 子 敬 志
- 川 崎 朗 源 間 敏 豊
- 近 藤 壽 郎 塩 崎 敏 譽
- 白 川 正 孝 高 橋 祐 二
- 田 中 敏 明 田 原 三 喜 夫

- 田 原 洋 一 長 瀬 宏 一
- 野 田 文 久 馬 場 正 信
- 町 田 英 俊 溝 超 正 信
- 室 伏 秀 昭 山 本 博 幸

賛助会員会費納入のお願い

本協議会は、会員の皆様からの貴重な会費で慰霊顕彰事業を運営しておりますが、皆様方のご理解と温かいご支援なくしては活動を継続することが困難となります。

誠に恐縮に存じますが、平成28年度の賛助会員会費の納入につきまして、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本年度会費未納の方には、払込用紙を同封しております。当協議会の事務処理との関係から、その後のご納金と本お願いが行き違いになるかもしれません、その場合は、平にご容赦を賜りますようお願い申し上げます。

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会は、会員の皆様からの貴重な会費により、戦没者の慰霊顕彰事業を運営しております。

当協議会の活動にご理解をいただき、慰霊事業の永続を図るため、多くの方々の当協議会会員ご加入をお待ちしております。

皆様のご協力をお願いいたします。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

- 一 賛助会員 (本会の趣旨に賛同する個人) 年会費 三〇〇〇円
- 二 賛助特別会員 (特別御芳志の賛助会員) 年会費 五〇〇〇円
- 三 正会員 (本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体) 年会費 一〇〇〇〇円
- 四 特別会員 (本会の趣旨に賛同する法人・団体) 年会費 一口一〇〇〇〇円 (一口以上)